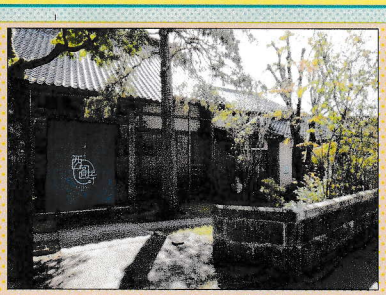
NPO法人ありんこに関する詳しい情報は公式ホームページ arinnko.sakura.ne.jp にて公開中！！

ありんこだより

発行 NPO法人ありんこ編集部
編集責任者　一戸 由佳
住所 青森県弘前市大字富栄字笹崎80－1
電話 0172－96－2774
Fax 0172－55－9591

社会福祉法人　佛子園　視察　in　石川県



10月23日（水）にありんこの職員4名が石川県でさまざまな事業を展開している社会福祉法人佛子園に視察に行ってきました。台風19号の影響で、北陸新幹線が止まってしまい、急きょ飛行機を乗り継いでの金沢入りとなりました。

佛子園は日本旅行のツアーで視察が行われるほど、毎年多くの人が訪れるそうです。数年前日本版CCRC（健康な時から住み、介護が必要になっても移転することなく継続的にケアの安心が保障される生活共同体）と言われて話題となりました。2015年の4月には安倍首相がその中の「ごちゃまぜ」の街share金沢を視察したことで有名になりました。佛子園はこの「ごちゃまぜ」というキーワードを用いて、例えば温泉や、フィットネスクラブなどを核にして、老若男女、障害のあるなしに関わらず様々な人たちが集うまちづくりをしています。

ツアーで2か所回りましたが、三草二木西圓寺では、古い寺をリノベーション。温泉施設とカフェがあり、地域住民の一般利用ができる施設内で障害者の生活介護や就労継続支援A型やB型の事業も一緒に行っているそうです。温泉やカフェにはスタッフとして障害のある方が働いていました。一般客と一緒に生活介護の利用者さんがお昼ご飯を食べていました。一見すると車椅子の客の多いカフェという感じで、見たことのない光景でした。（とても自然でした）

視察を終え、弘前にもこんな「ごちゃまぜ」のまちができたらいいなと本気で思いました。

金沢　金箔どら焼き！（居酒屋にて）

金沢駅前　鼓門（つづみもん）

佛子園で運営する野田町珈琲

医療的ケア児家族交流会（弘前会場）

10月27日（日）午前10時から、弘前市中央公民館岩木館にて、医療的ケアが必要な子どもたちを中心とした家族交流会に参加しました。この会は青森県重症心身障害児（者）を守る会が主催し、青森県が医療的ケア児家族交流事業として開いたものです。当日は6組の子どもと家族、あすなろや、さわらびなどの療育福祉センターの方々、県内特別支援学校の先生や看護師、県の障害福祉課の担当者、弘前市の相談支援専門員、県病の小児科医師、医療や福祉の関係者が集まりました。音楽療法の先生の楽しい音楽遊びからはじまり、後半は2グループに分かれて家族と支援者が交流するひと時となりました。子どもを真ん中にして交流の輪が広がるといいですね。

やよあかでのインフルエンザワクチン接種について

NPO法人ありんこ会員様で「やよいのあかり」で接種を希望される方は、お手数ですが、直接090－7936－8874（一戸由佳）までお知らせ下さい。五所川原の「いちのへ耳鼻科」休業日で、院長の出張のない日に対応します。

令和元年度青森県医療的ケア児支援シンポジウム

令和元年10月19日（土）に、青森県立保健大学において、上記のシンポジウムが開催されました。当日はあいにくの悪天候でしたが、福祉に関わる人たちが一堂に会する良い機会となりました。県内の医療的ケア児を支える仕組みはまだまだ整っていませんが、基調講演の寺澤大祐先生（岐阜県総合医療センター新生児内科）のお話しから、核になる人をつくって繋がることがとても大切で、特に行政側の人と繋がることで、「予算」が付き、思いを現実にすることもできると感じました。

二部のシンポジウムでは、それぞれの立場からの現状と課題が具体的に話され、医療的ケア児を受け入れる事業所の拡大には特に金銭面、人材確保の面で難しさがあることが共通認識されました。これを受け、青森県がどのような動きをしてくれるのか、期待したいと思います。

理事長のつぶやき

ラグビーと「犠牲」の精神

ワールドカップラグビーの初戦の勝利の後、スタンドオフの田村選手は「誰も僕らがどんな犠牲にしてきたかわからない」と語った。また、ウイングの福岡選手は「この時のために全ての時間を犠牲にしてこの勝利のために頑張ってきたので本当に最高です」と。

最近はあまり耳にすることがなかった「犠牲にする」という言葉が耳に残った。

ユーミンの「ノーサイド」という歌にも「何をゴールに決めて、何を犠牲にしたの」という歌詞がある。

ラグビーのことをちょっと知っているつもりだった私は、動揺した。

ラグビー憲章には「品位、情熱、結束、規律、尊重」という５つの言葉がある。しかし犠牲の文字はない。ラグビーの精神として、「一人はみんなのために、みんなは一人のために。」犠牲にする、という意味は暗に含まれているような気がするが。

「犠牲」という言葉に私がこんなに反応するのは、多分福祉の世界に身を投じているからだろう。

「自己犠牲」の精神がなければ成り立たないような現状。ワークライフバランスにも働き方改革にも取り残されて、ガラパゴス化している。自らを犠牲にして他のために生きるような、他者を生かすことに喜びを感じるような人でないと、この仕事は務まらないのではないか。人材の確保と育成に、頭を悩ませていた私は、日々そんなことばかり考えていたのだが、今回のワールドカップの最中に、すごいひらめきを持った。

「そうだ、ラガーマンを採用しよう！！」